

米づくり情報 (NO. 2)

令和3年6月22日

伊万里・西松浦地区農業技術者連絡会作物部会

1 気象概況 (アメダス観測地：伊万里)

月	半旬	平均気温		最高気温		最低気温		降水量		日照時間	
		平年値 ℃	本年値 ℃	平年値 ℃	本年値 ℃	平年値 ℃	本年値 ℃	平年値 mm	本年値 mm	平年値 時間	本年値 時間
5月	6	20.1	19.6	25.5	25.1	15.2	14.4	26.1	34.5	36.1	42.8
6月	1	20.6	21.1	25.8	25.8	16.3	17.2	24.3	63.5	27.1	15.5
	2	21.3	23.4	26.1	29.8	17.3	18.3	33.7	0.0	24.1	50.9
	3	21.9	23.6	26.5	27.1	18.2	21.2	48.2	36.0	22.1	12.3
	4	22.4	22.3	26.8	26.2	19.0	19.6	67.9	38.5	19.6	24.6
	5	23.1	—	27.1	—	20.0	—	85.9	—	16.0	—
	6	24.0	—	27.7	—	21.1	—	95.6	—	14.1	—

【5月6半旬～6月4半旬の気象概況】

- ・気温は平年並みからやや高く推移し、日照時間は平年の113%と平年より長く確保できた。
- ・降水量は平年の約86%とやや少なく、特に6月2半旬からは平年の50%と少ない。

2 生育状況 (6月22日)

項目 品種(設置場所)	年次	草丈 (cm)	莖数 (本/㎡)	主稈出葉数 (L)	葉色 SPAD	概要
夢しずく 6/2移植 東山代町脇野	本年値	35.6	214	6.5	37.0	<ul style="list-style-type: none"> ・草丈は、平年並み ・莖数は、平年よりやや少ない ・主稈出葉数は平年より1.2L少ない ・葉色は平年より淡い。
	平年値	35.2	247	7.7	40.8	
	平年比	101	86	-1.2	-3.8	

※夢しずくの耕種概要は、稲作情報 No.1 を参照。

3 今後の管理

1) 山間早植え水稻 (5月上旬移植)

- ・現在中干しの時期を迎えている。
- ・今後、幼穂形成期を迎え、稲の用水要求度が高い時期となるため落水を避け、湛水状態を保つ。
- ・7月上旬には幼穂形成始期(幼穂長1ミリ)を迎える。幼穂形成始期を迎えた圃場では、次項の表を参考に穂肥を施用する。
- ・梅雨に入り曇天の日が続くことが予想されるため、「いもち病」などの発生に注意する。特にいもち常発地では発生状況を確認し、病斑が確認された場合は速やかに防除を実施する。

表 夢しずく穂肥診断基準

幼穂形成始期の草丈(cm)	葉 色		施 用 時 期		穂肥施用量 (kg / 10a)	
	群 落	SPAD-502	出穂前日数	幼 穂 長	窒素成分量	BB602
	3.0以下	34以下	22~20日前	1 mm	3.0	18 kg
73cm以下	3.0~3.5	38以下	20~18日前	2 mm	3.0	18 kg
	3.5~3.8 3.8以上	38~39 40以上	15~14日前 晩限は止葉抽出終了まで	10~15mm	1.5~2.0 1.0以下	10~12kg 6 kg
73~79cm	3.0~3.5 3.5~3.8 3.8以上	34以下 38~39 40以上	20~18日前 15~14日前	2 mm 10~15mm	1.5~2.0 1.0	10~12kg 6 kg
80cm以上	原則として施用しない					

【穂肥診断の方法】

- ①幼穂形成始期頃の草丈を測る。 ②葉色（群落・SPAD 値）を測る。
- ③上記①②の測定値を診断指標に当てはめ、施用量を確認する。
- ④施用量を確認したら、基準の施用時期に穂肥を施用できるよう準備する。
- ⑤穂肥は、湛水状態で施用し、最低4日間は止水し、落水しない。

2) 普通期水稻「夢しずく」

- 分けつ期を迎えている。水管理は浅水管理とし、分けつの発生促進に努める。
- ガス対策として移植後15日、25日頃は夜干しなどを行い、根の活力を高める。
ただし、用水確保が難しい地域では落水せずに湛水状態を保つようにする。
- **有効茎（1株当たり20本程度）が確保できた圃場から順次中干しに移行する。**
- 中干しは約1週間、土壌表面に軽い亀裂が入り、足跡がわずかにつく程度とし強い中干しは避ける。中干し後は間断灌水を行う。なお、強い中干しとなった圃場（土壌が白乾し、手が入るほどの亀裂がある）では、一端通水し、ならしをしてから間断灌水に移行する。
- 移植後に湛水状態が保てず、除草剤処理後の水管理が徹底できなかった圃場では、ヒエ、コナギやホタルイ等の雑草の発生が散見される。速やかに、中後期除草剤による防除を徹底する。

3) 普通期水稻「たんぼの夢」、「ヒノヒカリ」等

- 除草剤処理後1週間経過した圃場は、浅水管理に移行し茎数確保に努める。
- スクミリンゴガイが多い圃場は、速やかに浅水管理とし、スクミノン等での薬剤防除を徹底する（移植直後と移植後1週間後の2回散布で効果が高い）。

※除草剤は、散布後3日経過すれば有効成分が土壌に吸着される。除草剤の処理層が破壊されないよう水尻を止水して湛水状態を保ち、自然落水によって田面が見えてきても1週間は入水しない。ただし、除草剤散布後24時間以内に、**大雨等によりオーバーフローした場合**、1週間後の雑草発生状態を確認し除草剤効果が期待できない場合は、中後期剤等による防除を行う。

4) 共通

(いもち病)

・6月20日までのBLASTAM情報(気象条件のみによって葉いもちの発生を予測するシステム)によると、伊万里では6月17,18日に葉いもちの感染好適条件が観測されている(好適条件が観測された1週間後に初発生や病斑数の急激な増加が予想される)。今後発生状況に注意し、進展型病斑が確認された圃場では、オリブライト粒剤等で速やかに防除を行う。



・圃場内に放置されている補植苗は「いもち病」の温床になるためすみやかに除去する。

BLASTAM情報第3号(葉いもち感染好適条件の出現状況)(6月21日更新)

月	日	福岡					長崎				
		唐津	伊万里	佐賀	嬉野	白石	前原	大宰府	久留米	松浦	佐世保
6月	1日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	2日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	3日	-	-	-	●	4	-	-	-	-	-
	4日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	5日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	6日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	7日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	8日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	9日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	10日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	11日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	12日	-	-	2	-	-	-	-	-	●	-
	13日	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
	14日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	15日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	16日	-	4	-	-	-	●	-	-	●	-
	17日	-	●	-	●	-	●	-	-	●	-
	18日	●	●	●	●	-	●	●	●	●	●
	19日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	20日	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

- 1 : 準好適条件 (湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が20℃未満)
- 2 : 準好適条件 (湿潤時間は10時間以上であるが、前5日間の平均気温が25℃以上)
- 3 : 準好適条件 (湿潤時間は10時間以上であるが、湿潤期間中の平均気温が15~25℃の範囲外)
- 4 : 準好適条件 (湿潤時間が湿潤期間中の平均気温ごとに必要な時間数より短い)
- : 好適条件 (湿潤時間が長く気温も適当で、葉いもちの感染好適条件が出現した)
- : 好適条件の出現なし
- ? : 判定不能

BLASTAMの活用方法

- (1) BLASTAMは、気象条件(アメダスデータ)のみによって葉いもちの発生を予測するシステムである。しかしながら、実際の圃場における葉いもちの発生には、気象条件の外にも、菌の多少(密度)、イネ品種による抵抗性や体質、薬剤防除条件などが大きく関与している。したがって、BLASTAMは、あくまでも葉いもち発生予測の参考資料の一つとして扱う。
- (2) BLASTAMは、葉いもちを対象としており、稲の移植約20日後を起点とした35日間(6月15日移植の場合、7月5日~8月10日)が適用期間とされている。ただし箱施肥が行われた圃場では、その持続期間中はBLASTAMは使用できない。
- (3) 葉いもちは、菌の侵入から発病までの潜伏期間が約1週間である。そのため、BLASTAMによる感染(準感染)好適条件が現れた場合、感染株では約1週間後から初発生あるいは病斑数の急激な増加が予想できる。
- (4) BLASTAMによる感染(準感染)好適条件の出現回数が多いと、その地域の葉いもちの発生面積が増加し、発病程度も著しくなることが予想できる。

(ウンカ類)

佐賀県嬉野市では、5月11日に1頭のトビイロウンカの飛来が確認されている。今後の飛来状況や圃場条件(移植時期や品種、圃場の場所等)によってウンカ類の発生量は異なるため、注意深く圃場を観察する。

(※長崎県諫早市、佐世保市共に、6月3日に白熱灯によるトビイロウンカ1頭の誘殺が確認されている。)

ウンカ類幼虫の見分け方について

	若齢幼虫の体色	中~老齢幼虫の体色	水面での後脚の出し方
セジロウンカ	白っぽい	灰白の斑紋	 : 真横
トビイロウンカ	白っぽい	薄茶か茶褐色	 : 真横~やや斜め後ろ
ヒメトビウンカ	黄褐色	淡黄色か薄茶か茶褐色 (体側の色が濃い場合あり)	 : 斜め後ろ

(中干し)

○土中への酸素供給による還元状態の解消

湛水状態が続くと酸素不足により、土中が還元状態となる。還元状態が続くと、有機酸等の有害物質が発生し、根に障害を発生させ、稲の生育が阻害される。このため、落水し土中に酸素を供給することで還元状態を解消し、有害物質の発生を抑え根の健全化を図る。

○窒素制限による稲体の生育調整

穂首分化期にあたる出穂前 30 日くらいに稲が窒素を吸収すると、籾数過多となることによる登熟不良、また、下位節間が伸長することにより倒伏の可能性が高くなる。このため、穂首分化期前に、中干しを行い土壌窒素を低減させ、前述のような生育とならないようにする。また、稲体の窒素制限により無効分げつを抑制する。

○土壌の硬化

土壌を固めることで、稲株支持力向上により倒伏軽減が期待される。また、地耐力を高めコンバイン収穫の作業性を向上させる。



中干し程度
土壌表面に軽い亀裂がはいる



間断灌水

水尻をとめて自然落水で田面の水がなくなり足跡の底に水がたまる状態を見られたら、入水する

※茎数が少ない圃場は茎数を確保するため、田面がひび割れるような強い中干しは行わず、中干し後の間断灌水の落水期間を長めにして土壌を固める。

※強すぎる中干しは過度な断根を助長し、稲の生育が停滞・抑制されるため行わない。ただし、過繁茂となっている場合は強めの中干しを行う。

※出穂の 25 日前以降（穂ばらみ期）の水不足は褐変籾の発生を助長して、登熟不良による減収を招くことがあるため、穂ばらみ期の中干しは避ける。

※中干し終了後は、急激に湛水状態にすると、酸化状態にあった根が、急激な酸素不足で根腐れする場合がありますので 2～3 回走り水をしてから湛水する。

令和3年産水稻生育期間気象グラフ（アメダス：伊万里）

西松浦農業改良普及センター

